

保坂本『源氏物語』と穂久邇本『源氏物語』の本文

— 酷似する横笛と鈴虫の本文について —

竹
部
歩
美

【論文】

保坂本『源氏物語』と穂久邇本『源氏物語』の本文

— 酷似する横笛と鈴虫の本文について —

竹部 歩美

はじめに

本稿は、鎌倉時代の書写と目されている『源氏物語』写本である、保坂本と穂久邇本の、横笛と鈴虫とが、非常に似通った本文を持つものであることについて報告しようとするものである。

保坂本と穂久邇本の二つの写本は、例えば松風や薄雲↓の冒頭を見ると異同が散見されるのに対し、横笛と鈴虫を見ると、他の諸写本にはない異文が保坂本と穂久邇本とで一致して見られたり、文言の脱入が共通して見られたりするなどして、その本文が酷似しているようなのである。このことに関しては、池田（一九七九）が、穂久邇本の竹河の冒頭付近の本文を挙げて「（穂久邇本は）保坂本に近いよう」だとし、横笛、鈴虫、柏木も同様だとも述べている。

また、伊藤（二〇〇一）は鈴虫が「穂久邇本、保坂本、国冬本、言経本の四本は類似した本文を見せる傾向がある」と述べ、保坂本と穂久邇本の鈴虫で一致する独自異文を一例挙げている。しかし、この二つの写本の本文が近似していることについての詳細を明らかにしてくれる先行研究は管見の限りではないようである。

そこで、本稿は、保坂本と穂久邇本の横笛と鈴虫の本文の比較、『源氏物語大成校異篇』本文（以下『大成』）との比較、また、他の書写本との比較によって、この二つの写本の横笛と鈴虫の本文が酷似するものであることについて報告する。

保坂本のテキストには、東京国立博物館蔵本、伊井春樹編（一九九七）『保坂本源氏物語 第八卷』（おうふう）を用い、穂久邇本のテキストには、穂久邇文庫蔵本、財団法

人日本古典文学会編（一九八〇）『日本古典文学影印叢刊6 源氏物語（四）』（貴重本刊行会）を用いる。写本の用例は翻刻して示し、『大成』の本文を私に表記を改めたものと併記する。

一・保坂本と穂久邇本

保坂本は浮舟を欠く53帖が現存する。松風から夢浮橋までの36帖が鎌倉時代中期の書写とされ（大津一九六〇）、桐壺・絵合は室町時代の補写とされる。書写者として慈鎮や冷泉為相の名が挙げられてはいるが、筆者未詳のものが多く、横笛・鈴虫の書写者は未詳である（伊井一九九七）。鎌倉期書写の36帖は『源氏物語大成』の校合本として採用されており、『源氏物語別本集成』（以下、『別本集成』）の校合本としても採用されている。『源氏物語別本集成統』（以下、『集成統』）では桐壺から松風までが採用されている。なお、横笛の表紙の中央には「廿二 よこぶえ」とあり、鈴虫の表紙の中央には「廿二のならひ すゝむし」とある。保坂本は横笛が24丁、鈴虫が22丁あり、本文は半葉に10行ずつ示されている。

穂久邇文庫本は54帖が現存しており、「桐壺は補写か」（大津一九六〇）とされる。書写年代は鎌倉時代とされ、阿部（一九八〇）に拠れば、鎌倉時代末期から南北朝時代初期頃とされる。書写者は4人程度であり（大津一九六〇）、

冷泉為相・二条為明・二条為定・後光厳院が挙げられているが、その筆はさらに多くに分かれるという（阿部一九八〇）。横笛・鈴虫の書写者は二条為定とされる（阿部一九八〇）。穂久邇本は、『大成』ならびに『別本集成』では校合本としては採用されていない。『集成統』では採用されているものの、『集成統』の刊行は現在第七巻までであるため、『集成統』で知ることのできる穂久邇文庫本の本文は桐壺から梅枝までである。なお、穂久邇本は横笛と鈴虫が合綴になっており、横笛は26丁、鈴虫は22丁であり^②、本文は半葉に10行ずつ示されている。

書写年代が鎌倉時代を遡らない『源氏物語』にあつては、保坂本と穂久邇本は写本のなかでも古いものに属するものということになり、その点で軽視できない写本であると言える。しかし、先述のとおり、保坂本は『大成』と『別本集成』によってその本文を知ることができるが、穂久邇本の藤裏葉から以降の本文は写本に拠らねばならない。そこで、穂久邇本の写本にあたると、横笛と鈴虫に、保坂本の本文に酷似した本文が見出されるのである。また、保坂本についても、改めて写本に拠ったとき、殊に、本文の修正箇所——見せ消ちや、文字を消した痕跡のあるところに文字を上書きしているところ^③——と、穂久邇本に一致するところがあることにも気付くのである。それゆえ、本稿をなそうとするのである。

二・保坂本と穂久邇本の単語の一致と不一致

横笛は、保坂本が³⁷⁷¹語、穂久邇本が³⁷³⁴語から成る。鈴虫は、保坂本が³¹³語、穂久邇本が¹⁰⁴語から成る⁽⁴⁾。本節では、まず、単語の一致・不一致についての考察を行う。

二・一・単語の一致

歴史的仮名遣いの相違(例：たまへーたまえ)、漢字表記と仮名表記の相違(例：給へーたまへ・我ーわが)、音便形と非音便形の相違(例：給うてー給ひて・はべめりーはべるめり)は異同とは見なさないこととし、また、見せ消ちの場合はそこには語句がないこととして、二つの写本を対照する。すると、次の用例1〜6では傍線を付した箇所は「異同あり」となり、傍線のないところは「異同なし」となる。用例4の保坂本「(ことゝも)を」は見せ消ち(実際には「越(を)」にニが付されている)となっており、穂久邇本にはその「を」が本文にあるので「異同あり」として一旦処理するが、実は、この点が重要となるので、改めて、第四節で詳しく述べることにする。

1 御寺のかたはら^{てら}近き林^{ちか}に^{はやし}抜きいでたる筈^{たかうな}

〈大成・横笛、一二七〇③④〉

○みてらのかたわらちかきはやしにぬきいでたるたかうな

〈保坂本、二一ウ②③〉

○御寺のかたはらちかきはやしにぬきいでたるたかう

な
〈穂久邇本、三ウ③⑤〉

2 人の心とどめて思へりしもの、行くべきかたにもあらず、女の御伝へはかひなきをや

〈大成・横笛、一二八〇⑩⑪〉

○人の心とどめておもへりしもの、ゆくへきかたにもあらずをんなの御つたへはたかひなきをや

〈保坂本、一六ウ⑧⑩〉

○人の心とどめておもへりしもの、ゆくへきかたにもかたもなくをんなの御つたへはたかひなきをや

〈穂久邇本、一九オ①③〉

3 二藍の直衣の限りを着て、いみじう白う光りうつくしきこと
〈大成・横笛、一二八二⑩⑪〉

○ふたあるのなをしはかりをきていみじうしろくひかりうつくしき事
〈保坂本、一九ウ④⑥〉

○ふたあるのなおしはかりをきて宮のしろくひかりうつくしきこと
〈穂久邇本、二二オ⑦⑨〉

4 そこの女房のことども、上下のはぐくみは、おしなべて
〈大成・鈴虫、二二九五⑧〉

○そこの女房のことゝもをかみしものはくゝみはをしなへて
〈保坂本、七ウ⑨⑩〉

○そこの女房のことゝもをかみしものはくゝみはをしなえて
〈穂久邇本、三六オ⑤〉

5 御前の人々たちこみて

〈大成・鈴虫、一三〇〇①〉

○こせんの人くたちこみて

〈保坂本、一四ウ①〉

○御まへの人くたちこみて

〈穂久邇本、四二ウ⑧〉

6いとわざと尋ねとりつつ放た

せたまへる

〈大成・鈴虫、一二九七③〉

○わざとたつねとりつゝはなた

せ給るに

〈保坂本、一〇オ⑩〉

○わざとたつねとひつゝはなた

せ給に

〈穂久邇本、三八ウ⑦〉

このように処理してゆくと、保坂

本と穂久邇本の単語の異同の有無は

【表1】のようになる。【表1】から、保坂本と穂久邇本

の単語の大半には異同がない——保坂本と穂久邇本の本文

はほぼ一致していると言い得るのである。

二・二・単語の不一致に関して

保坂本と穂久邇本の本文は酷似してはいるが、【表1】
のとおり異同もある。この、保坂本と穂久邇本の不一致点

——先の【表1】の「異同あり」をやや詳しく見たのが

【表2】である。表中の「保坂にあり穂久になし」とは、

【表1 保坂本と穂久邇本の単語の異同】

	横笛		鈴虫	
	保坂	穂久邇	保坂	穂久邇
語数	3771	3734	3131	3104
異同なし	3566		3004	
異同あり	263		145	

先掲の用例6のように、保坂本には傍線部の「(給)る」とおり助動詞があるのに対して穂久邇本にはこれがないといったものである。表中の「穂久にあり保坂になし」とは、先掲の用例3のように、穂久邇本には傍線部「宮の」の2語があるのに対して保坂本にはこれがないといったものである。「二本間に異同あり」とは、先掲の用例2では保坂本には「あらず」とあり、穂久邇本には「なくて」とあるように、二つの写本の対応する語に異同があるものである。

【表2 表1における「異同あり」の内訳】

	横笛	鈴虫
保坂にあり穂久になし	95	45
穂久にあり保坂になし	58	18
二本間に異同あり	110	82
合計	263	145

ここで、【表2】の、「二本間に異同あり」について特筆しておきたい事柄が一点ある。誤字と脱字に因る異同についてである。

この異同が、当該箇所に見れている同じ単語を二者が書写する際、一方は正確に書写し、一方は不注意によって正確な書写となつたために生じたものである——こうした、書写者の不注意に起因すると思われる書き損じは保坂本や穂久邇本のみならず、他の写本にも見られることがある(中村一九五四・竹部二〇二五・二〇一九a)——と仮定するならば、当該箇所は、表記上は確かに不一致ではあるものの、実質上は一致していると言い得るのではないかと考

えるのである。以下に具体例を挙げる。

次の用例7～10の穂久邇本の傍線部は、テキストとして成立していない。これらでは、「平假名相互間の混同」（中村一九五四）が起こっていると推測される。用例7・8の穂久邇本の、「そこはかと」「花そて」では、テキストとしては成立しない。ここは、穂久邇本の書写者が親本の「(己)」と「(二(に))」、「く(久)」と「て(天)」を混同したために生じた誤字であろうと考えられる。用例9は、夕霧が三条の邸に戻った際に見た、混みあった状態で横になっている女房たちの様子を述べるところである。よって、穂久邇本の「さしくむ（涙ぐむ意の動詞サシグム）」では文意が成り立たない。穂久邇本では底本の「しこ」の連綿を「しく」と混同したのではないかと考えられる。用例10は出家した女三宮の後見をするとは予想していなかったという文意のところであるため穂久邇本のように副詞トクとあっては文意は成立しない。ここでは「天(て)」と「とく」との混同が起こっているものと考えられる。

7そこはかとなきいにしへ語りに

〈大成・横笛、一二七七①〉

○そこはかとなきいにしへかたりに

〈保坂本、一一ウ⑦⑧〉

○そこはかとなきいにしへかたりに

〈穂久邇本、一三オ⑧⑨〉

8沈の花足の机に据ゑて〈大成・鈴虫、一二九二⑥〉

○ちんの花そくのつくゑにすゑて 〈保坂本、三オ②〉
○ちんの花そてのつくゑにすゑて

〈穂久邇本、三一オ⑤〉

9女房もさしこみて臥したる、人げにぎははしきに

〈大成・横笛、一二七八⑩〉

○女房のさしこみつゝしけき人けもにきわゝしく

〈保坂本、一三ウ⑩〉

○女はうのさしくみつゝしけき人氣もにきわゝしく

〈穂久邇本、一五ウ⑤〉

10かく思はざりしさまにて見たてまつる

〈大成・横笛、一二七三⑨〉

○かくおもはぬさまにて見たてまつる

〈保坂本、七オ⑤〉

○かくおもはざりしさまにとくみたてまつる

〈穂久邇本、八オ⑩〉

また、漢字と仮名の混同、漢字相互間の混同が起こっていると推測されるところもある。用例11では、「つらう思」う主体である秋好中宮を待遇する尊敬語タマフが求められるところであるが、穂久邇本ではタマフがなく、同じ位置に「ぬ」とある。ここでは「給」の崩し字形と仮名「ぬ」の混同が生じているものと考えられる。用例12では仮名「祢(ね)」と漢字「程」の崩し字形の類似に因る混同が疑われるところである。用例13では、女三宮の生活は自分が抱えるものだと源氏が考えているというところであるた

め、当該箇所は「わが」が適当である。穂久邇本は漢字「我」と漢字「猶」の崩し字形を混同しているものと推測される。

11「…」と、つらう思ひきこえたまふ

〈大成・鈴虫、一三〇二④〉

○とつらくおもひきこえ給

〈保坂本、一八オ⑩〉

○とつらくおもひきこえぬ

〈穂久邇本、四六ウ⑦〉

12例よりもあはれなる音にかき鳴らしたまふ

〈大成・鈴虫、一二九八①〉

○れいよりもあはれなるねにかきならし給

〈保坂本、一一ウ④〉

13上下のはぐくみは、おしなべて我（が）御あつかひにてなど

〈穂久邇本、四〇オ①〉

○かみしものはぐくみはをしなへて我御あつかひにてなん

〈保坂本、八オ①〉

○かみしものはぐくみはをしなへてなを御あつかひにてなん

〈穂久邇本、三六オ⑥〉

次に脱字が疑われる例を挙げる。用例中の傍線部を傍点線部と比較するとテキストとして成り立たないことは明らかである。書写者の不注意に因ると推測される脱字が生じているものと考えられる。

14いみじうらうたきを見たまつりたまふに

〈大成・横笛、一二七一⑦〉

○いみしくらうたきをみたてまり給に

〈保坂本、四オ⑧⑨〉

○いみじうらうたきもみたてまつり給に

〈穂久邇本、五ウ①〉

15（御八講など行はせたまふとぞ）

○御はかうなとをこなせ給とぞ

〈保坂本・鈴虫、二二オ③〉

○御八かうなとおこなはせ給とぞ

〈穂久邇本・鈴虫、五〇オ⑩〉

16昔の御童遊びの名残をだに

〈大成・横笛、一二七五②〉

○むかしの御わらはあそひのなこりたに

〈保坂本、九オ⑤〉

○むかしの御わらあそひのなこりたに

〈穂久邇本、一〇ウ①〉

17今はもて離れて心やすきに

〈大成・鈴虫、一二九六⑧〉

○いまはともてはなれて心やすきに

〈保坂本、九オ⑩〉

○いまはとてもはなれて心やすきに

〈穂久邇本、三七ウ⑦〉

このように、保坂本と穂久邇本には誤字・脱字の発生が疑われるところがある。その用例数は【表3】のとおりで

あり、穂久邇本にその多くを見る⁷⁾。

これらが、保坂本と穂久邇本の親本（ただしこれについては不明）の本文の異同に因るものではなく、当該箇所の一の語を書写してはいるのであり、誤字や脱字は書写者の書写の際の不注意によって生じた書き損じであると仮定すると、たとえば用例7は「そこはかとなき」という同一の語を保坂本と穂久邇本の書写者を見ており、「そこはかとなき」と書写しようとしているのではないか、つまり、実質上は一致していると言え、「異同なし」として扱ってもよいのではないかと考えるのである。

そして、仮にこれらを「異同なし」として扱うと、【表1】の「異同なし」の用例数に【表3】の数値が加わることになる。つまり、保坂本と穂久邇本の本文の近さがなお一層明確になってくるのである。なお、この点については、第四節で再度触れる。

二・三・『大成』本文との異同

保坂本と穂久邇本の本文の近さは、『大成』の横笛と鈴虫（ともに底本は大島本）と照らしたときにさらに明らかとなる。『大成』と保坂本との間に見られる異同と、『大成』と

【表3 誤字・脱字の内訳】

	横笛		鈴虫	
	保坂	穂久邇	保坂	穂久邇
誤字	1	22	0	49
脱字	2	7	1	2

穂久邇本との異同とが一致する場合があるからである。具体的には、(1)『大成』にはある語が保坂本と穂久邇本の当該箇所にはない、(2)『大成』にはない語が保坂本と穂久邇本の当該箇所にはある、(3)『大成』と対応する語に異同があり、その異同が保坂本と穂久邇本とで合致する、の3点があるのである。『大成』（横笛と鈴虫の底本は大島本）の横笛³⁹³⁸語と、鈴虫²⁹⁶⁶語について、前節と同様に単語の異同を確認してゆく。以下、具体例を挙げる。

まず、第一の、『大成』にある語が保坂本・穂久邇本にはない場合について具体例を挙げる。用例18には『大成』では係助詞モの下に「やうやう」の一語があるが、保坂本と穂久邇本にはこれがない。また、用例19では『大成』には「みまきなど」の前後に点線部の語句があるが、保坂本と穂久邇本にはこれらがない。このように、用例18・19は、『大成』にはある語が保坂本と穂久邇本に共通していないという点で一致している。

18 齢^{よはひ}なども、やう^{やう}やう^{やう}いたう^{わか}若び^給たまふべきほどにも

〈大成・横笛、一二八四⑩〉

○よはひなともいたくわかひたまふへきほどにも

〈保坂本、二二一オ④⑤⑥〉

○よはひなともいたくわかひたまふへき程にも

〈穂久邇本、二二五オ⑥⑦〉

19 御封^{みふ}のものども、国々^{くに}の御庄^{みさだち}、御牧^{みまき}などより奉るものども、はかばか^くしきさまのは

〈大成・鈴虫、一二九五④〉

○みふのものともくにくのみまきなどのはかくし

きさまのものは 〈保坂本、七オ⑩〉七ウ①

○みふの物ともくにくのみまきなどはかくしき

さまのものは 〈穂久邇本、三五ウ⑥⑦〉

次に、第二の、『大成』にはない語が保坂本・穂久邇本にはある場合について具体例を挙げる。用例20では『大成』には「飽かず」の直下に「口惜し」があるが、保坂本と穂久邇本にはこの2語の間に「いみじく」が共通してある。また、用例21では『大成』には「七そう（七僧）」の一語がなく、保坂本と穂久邇本には同じ位置にこの語がある。このように、『大成』にはない語が保坂本と穂久邇本の同じ箇所共通してあるという点で一致している。

20 飽かず口惜しきものに恋ひしのびたま（ふ）人ひと

〈大成・横笛、一二六九①〉

○あかすいみしくちをしきものにこひしのひたまふ

ひと 〈保坂本、一オ②〉

○あかすいみしくちをしき物にこひしのひ給人

〈穂久邇本、二オ②〉

21 御誦経の布施ふせなど 〈大成・鈴虫、一二九四⑨〉

○御す行とも七そうのふせなど 〈保坂本、六オ⑨〉

○御しゆ行とも七そうのふせなど

〈穂久邇本、三四ウ⑥〉

最後に、第三の、『大成』と対応する語に異同があり、そ

の異同が保坂本と穂久邇本とで合致する場合についての用例を挙げる。用例22・23は、『大成』では「遊び」「念誦」とあるところに、保坂本と穂久邇本では「ひき（弾き）」「御をこなひ・い（御行ひ）」への異同があり、その異同が保坂本と穂久邇本とで一致している。また、用例24では「しづめ」が『大成』では動詞タマフの直下にあるのに対し、保坂本と穂久邇本では直上にある点で異同が一致している。

22 御琴ことどもは、調しらべ変かははらず遊あそびたまあそぶあそむあそかし

〈大成・横笛、一二七八⑫〉

○御ことゝもはしらへかはらすひきたまふ覧かし

〈保坂本、一四オ⑤〉

○御ことゝもはしらへかはらすひき給らんかし

〈穂久邇本、一五ウ⑩〉

23 端はし近ちかうながめたまひつ給つ念誦ねんじゆしたま給ふ給。

〈大成・鈴虫、一二九六⑪〉

○はしちかくなかめ給つゝ御をこなひし給

〈保坂本、九ウ⑦〉

○はしちかくなかめ給つゝ御をこないし給

〈穂久邇本、三八オ④〉

24 そなたに人々ひとは入れたいたま給ふ給。しづめて

〈大成・鈴虫、一二九三④〉

○そなたに人々ひとはいれしつめたまひて

〈保坂本、四オ⑨〉

○そなたに人々ひとはいれしつめたまひて

【表4 『大成』・保坂本・穂久邇本の異同】

	横笛	鈴虫
『大成』・保坂本・穂久邇本間に異同なし	3207	2648
『大成』に単語あり—保坂本・穂久邇本に対応語なし	364	92
保坂本・穂久邇本間に異同なし—『大成』に対応語なし	197	247
保坂本・穂久邇本間に異同なし—『大成』と異同あり	162	109
『大成』・保坂本間に異同なし—穂久邇本に対応語なし	83	38
『大成』・保坂本間に異同なし—穂久邇本と異同あり	90	69
『大成』・穂久邇本間に異同なし—保坂本に対応語なし	9	2
『大成』・穂久邇本間に異同なし—保坂本と異同あり	12	4
保坂本にのみ語あり—『大成』・穂久邇本に対応語なし	8	7
穂久邇本にのみ語あり—『大成』・保坂本に対応語なし	47	16
保坂本・穂久邇本間で異同あり—『大成』に対応語なし	3	5
『大成』・保坂本・穂久邇本間で異同あり	11	4

『大成』・保坂本・穂久邇本の三者間の単語の一致・不一致をみると、【表4】のようになる。【表4】の網かけを施した箇所から明らかのように、『大成』と保坂本との間に見られる異同と、『大成』と穂久邇本との異同とが一致するところが、多数あるのである。

前節に述べたように、保坂本と穂久邇本の間にも異同はあるので、『大成』と写本の一方が一致し、他方とは一致し

〈穂久邇本、三三ウ⑤〉

ないというところもあり、三者とも一致しないところもある。例えば、次の用例25は、表中の『大成』・保坂本間に異同なし—穂久邇本に対応語なし」に該当する。用例25には『大成』と保坂本には副詞イトがあるが、穂久邇本の対応箇所にはこの語がない。表中の『大成』・穂久邇本間に異同なし—保坂本と異同あり」の例が用例26であるが、『大成』と穂久邇本は「御心」で一致しているが、保坂本には「御心はへ」とある。表中の『大成』・保坂本・穂久邇本間で異同あり」とは、用例27の傍線部のように三者すべて異なっているものである。

25 親王たちなどもいとあまた参りたまへり

〈大成・鈴虫、一二九三⑬〉

○みこたちなどもいとあまた参り給へり

〈保坂本、五オ⑧〉

○御子たちなとあまたまいりたまへり

〈穂久邇本、三三ウ⑤⑥〉

26 はらからの君たちよりもまさりたる御心のほど

〈大成・横笛、一二六九⑩〉

○はらからのきみたちよりもまさりたる御ころはへ

のほと

〈保坂本、一ウ⑩〉

○はらからの君たちよりもまさりたる御心の程

〈穂久邇本、二ウ⑩〉

27 しるく鳴き伝ふるこそ少なかなれ。

〈大成・鈴虫、一二九七④〉

○しるくなきつたふるこそすくなかれ

〈保坂本、一〇ウ①②〉

○しるくなきつたふるこそすくなかりけれ

〈穂久邇本、三八ウ⑧⑨〉

このように、保坂本・穂久邇本の本文を『大成』と対照すると、異同もたしかにあるものの、『大成』と保坂本との間に見られる異同と、『大成』と穂久邇本との異同とが多くの箇所一致する。このことから、保坂本と穂久邇本の本文の近さがうかがえるのである。

二・四・『大成』諸写本との比較

さらに、保坂本と穂久邇本の横笛と鈴虫の本文の近さは、他の書写本との対照からも指摘することができる。

本稿末尾に付す【表5-1】【表5-2】は、『大成』と

保坂本・穂久邇本との間に、4語以上連続しての異同が見られる箇所を挙げ^⑧、同時に、その箇所に、鎌倉期の書写と目されている他の諸写本^⑨にも異同があるか否かを示したものである。表の横軸には私に付した写本の略称を示す（本稿末尾の調査資料参照）。表の縦軸には連番をとす。

連番の右に『大成』の用例を示す。その用例に付してある「」は、『大成』には「」内の文言があり、保坂本・穂久邇本にはないことを意味する。また、用例に付してある「」は、『大成』にはなく、保坂本・

穂久邇本にはあることを意味する。その、「」や「」に

括った文言が諸写本にもある場合には○を付し、ない場合は×を付してある。また、諸写本に当該箇所の本文がない場合には「-」を付してある。よって、例えば、【表5-

1】の①は、次の用例28のとおり、『大成』には「(おほかた)につけてたに(よに)」とあり、諸写本にも「につけてたに」の文言があるので表には「○」を付してあり、保坂本と穂久邇本では「につけてたに」がないので「×」が付してある。国宝『源氏物語絵巻』詞書にはここに対応する箇所の本文がないため「-」を付してある。【表5-1】の④では、次の用例29とおり、『大成』では「かきかへ給へ」の後に「りりけるかみの」が続くのに対し、保坂本と穂久邇本では「りりけるかみの」ではなく「よって表中の④の上段は「×」となっており）、「るかかせにつきて」とある（よって表中の④の下段は「○」となっている）。

28 六条の院にも、おほかたにつけてだに、世に^よ：

〈大成・横笛、一二六九②〉

○六条院にもおほかたにつけてたによに 〈池田本〉

○六条院にもおほかたにつけてたにこと 〈御物本〉

○六条院にもおほかたにつけてたに世に 〈国冬本〉

○六条院にもおほかたにつけてたによに 〈榊原本〉

○六条の院にもおほかたにつけてたに 〈為家本〉

○六条院にもおほかたにつけてたによに 〈尾州家本〉

○六てう院にもおほかたにつけてたによに 〈伏見本〉

- 六条のゐむにもおほかたにつけてたに 〈陽明本〉
- 六条の院にもおほかたにつけてたに 〈横山本〉
- 六条の院にもおほかたよに 〈保坂本、一オ④〉
- 六条院にもおほかたよに 〈穂久邇本、二オ④〉
- 29書きかへたまへりける紙の御几帳のそはよりほの見ゆるを 〈大成・横笛、一二七一①〉
- かきかへたまへりけるかみの御き丁のそはよりほのみゆるを 〈池田本〉
- かきかへ給へりけるかみの御きちやうそはよりほのみゆるを 〈御物本〉
- かきかへ給へりけるかみのみ木ちやうのそはよりほのかにみゆるを 〈国冬本〉
- かきかへ給へりけるかみの御帳のそはよりほのみゆるを 〈榊原本〉
- かきかへ給へりけるかみのみ木ちやうのそはよりほのみゆるを 〈為家本〉
- かきかへ給へりけるかみの御き丁のそはよりほの見ゆるを 〈尾州家本〉
- かきかえ給へりけるかみの御木丁のそはよりほのみゆるを 〈伏見本〉
- かきかへ給へりけるかみのみき丁のそはよりほのみゆるを 〈陽明本〉
- かきかへ給へりけるかみのみき丁のそはよりほのみゆるを 〈横山本〉

○かきかへたまへるかゝせにつきてみき丁のそはより見ゆるを 〈保坂本、三ウ⑦〉

○かき九へたまへるか風につきて御几帳のそはよりみゆるを 〈穂久邇本、四ウ⑨〉⑩

このようにして【表5-1】【表5-2】を一覧すると、4語以上連続して文言の脱入の異同がある箇所が保坂本と穂久邇本とで概ね一致していることが明らかとなる。また、諸写本とも照らし合わせると、その異同が、保坂本と穂久邇本ほどに一致して見られる写本は他にはないことも明らかとなる。

また、このことから、【表5-1】の⑨・⑩では、穂久邇本が、親本の本文を1〜2行書き落としたのだろうと考えられる。本稿がここまでに見てきた、穂久邇本の、保坂本との、単語の一致、『大成』との異同の一致、本節の【表5-1】【表5-2】に見る文言の脱入の一致の3点を考えると、⑨・⑩の当該箇所を、穂久邇本が意図的に削除したとは考えにくいからである。そのため、【表5-1】の⑨・⑩では穂久邇本は「一」を付したのである。次の用例30は表の⑨、用例31は表の⑩である。『大成』と保坂本にはある点線部の語句が穂久邇本にはない。

30頭は露草してことさらに色どりたらむ心地して、口つき、うつくしう匂ひ、まみ、のびらかにばづかしうかをりたるなどは、なほいとよく思ひいでらるれど、かれはいとかやうにきは離れたるきよらはな

りしもの物を

〈大成・横笛、一二七二⑭～一二七二⑮〉

○御くしはつゆくさしてことさらにいろとりた覧心ちしてくちつきらうたくにほひまみのゝひらかにはつかしきかほりなんとはなをいとよくおもひいてらるれとかれはいとかうやうにきははなれたるきよらはなかりし物を

〈保坂本、四ウ⑩～五オ⑤〉

○御くしはつゆくさしてことさらにいろとりた覧心ちしてくちつきらうたくにほひまみのゝひらかにきはなれたるきよらはなかりし物を

〈穂久邇本、六オ③～⑦〉

31 此この宮こそは、かたほなる思おもひまじらず、人の御有おほ様も思おもふに飽あかぬところなくとも物のしたま給ふべきを、かく：

〈大成・横笛、一二七三⑧⑨〉

○この宮こそはかたほなるおほえましらす人の御ありさまもおもふにあかぬ所なくとも物のしたまふへきをかく

〈保坂本、七オ③～⑤〉

○このみやこそかたほなるおほえましらすものしたまへかく

〈穂久邇本、八オ⑧⑨〉

三・保坂本と穂久邇本の不一致点

【表5—1】 【表5—2】には保坂本と穂久邇本に不一致点（横笛の⑧・⑫・⑳と鈴虫の①）があるが、これらは、

保坂本の本文の修正と加筆⑱に起因する。用例を挙げて説明したい。

横笛の⑫の保坂本では、「一」内の文言が、次の用例32のように（写本では実際には一文字ごとに＝が付されて）見せ消ちとなっており、その結果、『大成』と同じ本文となっている。一方、穂久邇本には、保坂本で見せ消ちとなっている文言が本文中にすべてある。

32 想夫恋を弾ひきた給たまふ。「思おもひおよび顔がほなるは…」

〈大成・横笛、一二七六①〉

○さうふれんをひき給「すのうちにきかせたてまつるおもひの」をよひかほなるは

〈保坂本、一〇ウ②〉

○さうふれんをひき□□すのうちにきかせたてまつるおもひのおよひかほなるを〈穂久邇本、一一オ①〉

横笛の⑧では、次の用例33のように、保坂本の当該箇所⑱に、元にあった文言を消し、そこに上書きして、「白き羅小紋の紅梅の御衣」と判読できる本文にした形跡が見られる。当該箇所には元にあった文字が消え残っており、「こ□□い□□もん」と見える。この消された「こ」に「うす物」の「う」が上書きされ、何らかの文字を消した上に「す物」を上書きされ、「もんの」を消した上に「このうはい」の文字が記され、その結果、『大成』と概ね同じ本文となっている。穂久邇本には「紅梅のこもんの」とあり、保坂本では消去されている「こ□□い□□もんの」と一致するものと推

測される。

33 白き羅しろきものに、唐からの小紋こもんの紅梅こうばいの御衣ぞの裾すそ、いと長ながく

〈大成・横笛、一二七一⑩⑪〉

○しろき【こ】《う》【□□い□もんの】《す物こも
んのこうはい》○御そいとなか

〈保坂本、四ウ④⑤〉

○しろき紅梅こうばいのこもんのいとなか

〈穂久邇本、五ウ⑧⑨〉

横笛の⑩は、用例34のとおり、保坂本には「ちごもいと
うつくしうおはする君なれば」が、見せ消ちと補筆の2箇
所に現れる。保坂本では、用例34で『□』の中の「ちごも…」
の文言を、実際には一文字ごとに二を付して見せ消ちとし
ており、『大成』と同じ位置に、この文言を補筆しているの
である。これに対し、穂久邇本では、保坂本が見せ消ちと
している位置にこの語句があり、保坂本の補筆部分はない。

34 胸むねをあけて、乳ちなどくくめた給ま（ふ）。ちごもいとう

つくしうおはする君なれば、白くしろをかきしげなるに、

御乳おちはいとかわらかなるを、心こころをやりて慰なぐさめた給まふ。

男をとこ 君きみも寄りおはして、「いかなるぞ」などのたま

ふ。 〈大成・横笛、一二七九⑫～一二八〇⑬〉

○御むねをあけてちなとくくめたまへり

しろくをかきしげなるちのいとかはらかなるをこゝろ
をやりてなくさめ給【ちごもいとをかしくおはする
きみなれば】おとこきみも【おきたまひ】《よりおは

し》【ていかなりつる【むと】そなとのたまふ

〈保坂本、一五ウ④⑤〉

○御むねをあけてちなとくくみたまへりしろくをか
けなるちのいとかはらかなるをこゝろをやりてなく
さめたまふちごもいとおかしくおはするきみなれば
をとこ君もおきたまひていかなりつる事そなとのた
まふ

〈穂久邇本、一七ウ⑥⑦〉

鈴虫すずむしの①では、用例35のように、保坂本では助詞ヲの下
に○が付され本文の右側に文言が補筆されている。穂久邇
本では保坂本が補筆している文言がない。

35 名香蜜かうみちをかくしほろけてたきにほはしたる

〈大成・鈴虫、一二九一⑩〉

○名かうをみづかしくほろけて たきにははしたる

〈保坂本、二オ④〉

○名かうをたきにははしける〈穂久邇本、三〇オ⑥〉
【表5-1】 【表5-2】において保坂本と穂久邇本で
異同が不一致の4例を以上のように見ると、保坂本が加筆
修正する以前の本文と、穂久邇本の本文とが一致してい
ると概ね言い得る。例えば、右の用例35（【表5-2】の①）
において、保坂本には補筆「みつをかくしほろけて」が
元はなかったと仮定すると、保坂本の元の本文と穂久邇本
の本文とは次のように同一となる。

【保】名かうをたきにははしたる

【穂】名かうをたきにははしたる

また、用例34（【表5-1】の㉑）の保坂本の補筆・見せ消ち・文言の修正をする以前の本文は次のようなものであったと考えられ、穂久邇本の本文と完全に一致するのである。

〔保〕御むねをあけてちなとくゝめたまへりしろくをかしかなるちのいとかはらかなるをこゝろをやりてなくさめ給ちこもいとをかしくおはするきみなれはおとこきみもおきたまひていかなりつることそなのたまふ

〔穂〕御むねをあけてちなとくゝみたまへりしろくをかしかなるちのいとかはらかなるをこゝろをやりてなくさめたまふちこもいとおかしくおはするきみなれはをとこ君もおきたまひていかなりつる事そなのたまふ

四・保坂本に見られる加筆修正

保坂本が加筆修正する以前の本文と、穂久邇本の本文とが一致する箇所は、前節に見た用例32～35の他にもある。

次の用例36・37では、保坂本の用例に付した『』の語が、一文字ごとに＝が付された見せ消ちになっている。これに対する穂久邇本の当該箇所には、保坂本が見せ消ちにしてある「〔衛門のかみ）のきみ」「〔しろき）の」が本文中にある。

保坂本には、このように、見せ消ちとなっている箇所が横笛に19箇所、鈴虫に7箇所ある。このうち、保坂本が見せ消ちとする以前の本文と穂久邇本の本文とが一致する箇所が、横笛に14箇所（26語）、鈴虫に6箇所（7語）ある。

36 かの衛門（彼）の督（かみ）、ただありしさまの

〈大成・横笛、一二七九⑤〉

○かの衛門のかみ『ゆきみ』たゝありしなからの

〈保坂本、一四ウ⑨⑩〉

○かの衛門のかみのきみたゝありしなからの

〈穂久邇本、一六ウ⑦〉

37 青（あ）き、白（しろ）き、紫（むらさ）の蓮（あ）を

〈大成・鈴虫、一二九一⑩〉

○あをきしろき『ゆ』はちすを 〈保坂本、二オ②〉

○あをきしろき『ゆ』はちすを 〈穂久邇本、三〇オ④〉

用例38・39では、保坂本では、「さそひ」「事も」に一字ごとに＝が付されて見せ消ちになっており、その見せ消ちの右側に「そゝのかし」「ちこ」が傍書の形で修正が施されている。これに対し、穂久邇本の当該箇所には、保坂本の元の語の「さそひ」「ちこ」がある。

保坂本には、このように、文言を見せ消ちにし、その傍に修正した文言を傍書するところが、横笛に8箇所ある。このうち、保坂本が見せ消ちとする以前の本文と穂久邇本の本文とが一致する箇所が2箇所（2語）ある。用例38・39がその2例である。

38 せちに簾すのうちをそそのかしきこえたまへど

〈大成・横笛、一二七六③〉

○せちに『ませひ』きこへさせたまへと

〈保坂本、一〇ウ④⑤〉

○せちにさそひきこへさせたまへと

〈穂久邇本、一二オ④〉

39 世よの常つねのうつくしき児こどもと見えたまふに、

〈大成・横笛、一二八三③〉

○よのつねのうつくしき『事も』のいとあてなるとみ

〈保坂本、二一〇オ⑦〉

○よのつねのうつくしきことものとあてなるとみえ

たまふ

〈穂久邇本、二三オ②〉

用例40の保坂本では「われ」が消された痕跡があり、そこに「まろ」が上書きされて修正が施されているが、穂久邇本では、その、保坂本の修正前の語「われ」がある。

用例41では保坂本では、用例に付した『 』内の文字が消されており、『 』に記した文字が、その消された文字に上書きされている。保坂本では「とを」の上に「はるけ」、「中」の上に「の」、判読不能の「□□」の上に「松はら」が上書きされて『大成』と同じ本文への修正がなされている。保坂本には元は「山とをき野中□□には」とあることが消え残っている文字から判るのであるが、これと穂久邇本の本文とが一致するものと推測される。また、用例41では「こゑく」のくの字点と、「いとへたて心」の直上にあ

る「るを」にニが付されて見せ消ちになっており、その間にある「さな」は消されてその上に「ぬも」が上書されている。この、保坂本が見せ消ちとなる以前、上書される以前の本文と穂久邇本とが一致するのである。

保坂本には、このように、元の文言を消し、消したところに文言を上書している箇所が、横笛に29箇所、鈴虫に7箇所ある（元の文字が判読不能のものも含む）。このうち、保坂本にあった元の文言と穂久邇本のそれとが一致する箇所が、横笛に19箇所（33語）、鈴虫に3箇所（3語）ある。

40 まろ顔かほは隠かくさむ。 〈大成・横笛、二二八一⑧〉

○『われ』『まろ』かほはかくさん

〈保坂本、一八オ①〉

○われかほはかくさん

41 人間きかぬ奥山おく、はるけき野のの松原まつばらに声惜こゑをしまぬも、

いと隔へだて心ある虫むしになん

〈大成・鈴虫、二二九七⑤〉

○人きかぬをく山『とを』『はるけ』き野『中』の『』『□□』に『松はら』にこゑくをしま

〈保坂本、一〇ウ⑤⑥〉

○人きかぬをく山とをき野中などにはこゑくをしま
さなるをいとへたて心あるむしになん

〈穂久邇本、三九オ③④〉

また、保坂本には先掲の用例34や用例35のような方法で

語句^⑧の補筆がなされているところが、横笛には8箇所、鈴虫には先掲の用例35の1箇所があるが、穂久邇本の対応箇所にはこれらの語句はない。

以上のことから、保坂本が加筆修正する以前の本文と穂久邇本の本文とが概ね一致すると言い得ると考えるのである。

見え消ちや消去された字句については、第二節における、保坂本と穂久邇本の単語の異同の考察の際には「異同あり」としたところのものであった。しかし、このように、保坂本の修正以前の本文と穂久邇本とを照らすと、そこに一致点が見出されるのである。そこで、保坂本の、(1)見え消ちとなる前の単語、(2)見え消ちにして傍書される前の単語、(3)消去して上書される前の単語と、穂久邇本の単語とが判読し得る範囲内で一致するものを、ここで、仮に、「異同なし」として扱うこととし、併せて、第二節―二で考察した誤字・脱字についても「異同なし」として扱くこととして、第二節に示した【表1】を改めてみると、【表6】のようになる。そして、【表6】から、保坂本と穂久邇本の間では単語の大半には異同がなく、単語の異同が少ないことが改めて明らかとなり、この二つの写本の本文は酷似するものであると言い得るのである。

保坂本と穂久邇本の親本(底本)は不明であるが、本稿の考察を踏まえると、二つの写本は非常に酷似した本文を持つ写本を親本としているのではないかと推測される。ま

た、その親本の本文は、保坂本が加筆修正を施す前の姿を呈していたのではないかと推測される。ただし、この点はあくまで推測であり、その域を出ない。

おわりに

以上、保坂

本と穂久邇本の横笛と鈴虫の、本文の酷似について考察してきた。本稿で述べたことをまとめると次のようになる。

- 一・保坂本の横笛・鈴虫と、穂久邇本の横笛・鈴虫の本文はほぼ一致する。
- 二・保坂本と穂久邇本の単語は大半が一致し、異同が非常に少ない。
- 三・保坂本と『大成』の異同と、穂久邇本と『大成』の異同とがほぼ一致する。保坂本と穂久邇本では異同が一致

【表6 保坂本と穂久邇本の単語の異同】

		横笛		鈴虫	
		保坂	穂久邇	保坂	穂久邇
		3771	3734	3131	3104
異同なし	単語一致	3566		3004	
	誤字	23		49	
	脱字	9		3	
	見え消ち	26		7	
	傍書前	2		0	
	上書前	33		3	
異同なし		3659		3066	
異同あり		170		83	

するが、他の諸写本ではこれほどの一致は見られない。

四・保坂本が補筆・見せ消ち・文字の消去とそこへの上書といった加筆修正を施す以前の本文が、穂久邇本の本文と概ね一致する。

注

(1) 第一節で述べるように、保坂本は松風以降が鎌倉期の書写とされる。そこで、試みに、松風と薄雲についての対照を試みたのである。

(2) 穂久邇本のテキストでは表紙の次の遊紙が1丁表裏とされており、横笛の本文に対して丁数は2丁表と27丁裏が付されている。28丁裏には「すゝむし」とあり、鈴虫の本文には29丁表と50丁裏が丁数として付されている。なお、保坂本・穂久邇本とも、和歌は三句までと四句以降が2行に分けて示される点では同じだが、異なる点もある。保坂本の横笛では、和歌は2行とも2字下げで示され、和歌に続く本文は改行して次行の行頭から示される。これに対し、鈴虫では和歌は1行目が1字下げで示され、2行目は行頭からはじまる。和歌に続く本文は和歌の末尾に続けて示される。穂久邇本の横笛では、和歌は1行目が2字下げで示され、2行目は行頭からはじまる。和歌に続く本文は改行して次行の行頭から示される。これに対し、鈴虫では2行とも2字下げで示され、和歌に続く本文は改行して

次行の行頭から示される。

(3) 『別本集成』に拠ってもこれらを知ることができる。

しかし、これに記されていないところもあることが、保坂本のテキスト、ならびに、文化財高精細画像公開システム「e国宝」(<http://www.emuseum.jp/>)に拠ると明らかになる。

(4) 本稿では語をいわゆる学校文法の十品詞で概ね分類している。語の認定のしかたによっては語数は増減するであろうが、本稿の論旨には影響しない。

(5) 用例12は「ほど」であっても文意は通る。しかし、『大成』と保坂本が「音(ね)」とするところ、あるいは、保坂本が「音(ね)」とするところを穂久邇本の横笛・鈴虫には、「ほど(程)」とするところが、用例12を含め3例あるため、保坂本の書写者の漢字と仮名の混同ではないかと疑うのである。

(6) 『大成』(大島本)にはない異文であるため、保坂本・穂久邇本の本文を私に整理して示した。

(7) 穂久邇本の若菜上にも誤字・脱字の例があることが秋山(一九八三)により報告されている。なお、阿部(一九八〇)に拠れば、若菜上の書写者は二条為明である。

(8) 紙幅の都合に因る。

(9) 『大成』『別本集成』の異同を参照し、併せて、閲覧し得る写本についてはそれに拠って文言の有無を確認

した。『大成』『別本集成』『集成続』に拠ることのできない伏見本については写本に拠ってこれを確認した。

(10) 写本の実際には「(かき)た(へ)」に対してニが付されて見せ消ちとなっており、その右側に「か」が記されている。

(11) 「e 国宝」(注3参照)を参照すると、紙媒体のテキストよりも明確にこれらを確認することができる。

(12) 保坂本の横笛の四丁裏五行目は、周囲に比して料紙が黒ずんでおり、本文は他の行に比べて文字が小さく、文字間も詰まっている。なお、保坂本の横笛には同様の箇所が見られる。

(13) 文字の書き落としを補ったと見られるものを除く。

参考文献

- 秋山瑞穂(一九八三)「穂久邇本『源氏物語』の本文について」『学習院大学国語国文学会誌』二六
- 阿部秋生(一九八〇)「解説」財団法人日本古典文学会編『日本古典文学影印叢刊7 源氏物語(五)』貴重本刊行会
- 伊井春樹(一九九七)「保坂本源氏物語解題」伊井春樹編(一九九七)『保坂本源氏物語 第十二巻・別冊二』おうふう
- 池田利夫(一九七九)「源氏物語の本文研究―穂久邇文庫蔵本の性格を中心に―」『日本古典文学会会報』七四

伊藤鉄也(二〇〇一)「源氏物語別本群の長文異同―国冬本「鈴虫」の場合」『国文学研究資料館紀要』二七(伊藤鉄也二〇〇二『源氏物語本文の研究』(おうふう)所収)

岡嶋偉久子(二〇一〇)『源氏物語写本の書誌学的研究』おうふう

大津有一(一九六〇)「諸本解題 穂久邇文庫蔵源氏物語」『源氏物語事典 下巻』東京堂

源氏物語別本集成刊行会(一九八八―二〇〇二)『源氏物語別本集成』桜楓社

源氏物語別本集成刊行会(二〇〇五―二〇一〇)『源氏物語別本集成続』おうふう

竹部歩美(二〇一五)「国宝『源氏物語絵巻』詞書の仮名表記について―読解上の問題点と変体仮名の運用―」『言語の研究』一

(二〇一六)「国宝『源氏物語絵巻』詞書の語法小考―『源氏物語』との比較から―」『言語研究』七九

(二〇一九a)「伝西行筆『源氏物語』竹河に見られる語法小考」『言語研究』八二

(二〇一九b)「二つの伝西行筆『源氏物語』竹河の仮名表記」『国際関係・比較文化研究』一七―二

中村義雄(一九五四)「源氏物語絵巻の詞書について」『美術研究』一七四(『絵巻詞書の研究』(角川書店、一九八二)所収)

調査資料

伏見：伏見本：伏見天皇本。吉田幸一編（一九九五）『源氏物語 伏見天皇本影印9 古典文庫第553冊』古典文庫。
 保坂本：伝藤原為家等各筆本。東京国立博物館蔵。伊井春樹編（一九九七）『保坂本源氏物語』おうふう。
 穂久邇本：伝二条為定筆。穂久邇文庫蔵。財団法人日本古典文学会編（一九八〇）日本古典文学影印叢刊『源氏物語』貴重本刊行会。
 次のものは『大成』『別本集成』の異同に拠る。
 池田：池田本。御物：御物本。国冬：国冬本。榊原：榊原本。為家：為家本。為氏：為氏本（『大成』の青表紙本「島」）。俊成：俊成本（『大成』の河内本「俊」）。中山：中山本。尾州：尾州家河内本。平瀬：平瀬本。陽明：陽明本。横山：横山本。詞書：国宝『源氏物語絵巻』詞書。

【表5-1 横笛に見られる文言の脱入】

		保坂	穂久	池田	御物	榊原	為家	尾州	平瀬	伏見	陽明	横山	詞書
①	1269 ②	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	—
	おほかた {につけてたに} よに												
②	1269 ③	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	—
	御心に {ましてこれは} あさ夕にしたしく												
③	1269 ⑪	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	—
	御心のほとをいとかくは {思きこえさりき} と												
④	1271 ①	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	—
	かきかへ給へ{りけるかみの} み木ちやうのそはより												
	かきかへ給へ<<りかかせにつきて>>み木ちやうのそはより			×	×	×	×	×	×	×	×	×	—
⑤	1271 ③	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	—
	思ひこそいれ<<いと、世をいかにおほしなりにけるにかと>>うしろめたけなる												
⑥	1271 ⑨	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	—
	もてなしてそきこえ {てそおはしける}												
	もてなしてそきこえ<<たまふ>>			×	×	×	×	×	×	×	×	×	—
⑦	1271 ⑨	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	—
	わか君 {はめのとのもとに} ね給 {へりけるおき} てはひいて {給て}												
⑧	1271 ⑪	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	—
	しろきうすものにからのこもの {こうはいの御そ} のすそ												
⑨	1272 ①	○	—	○	○	○	○	○	○	○	○	○	—
	みのひらかに {はつかしうかほりたるなどはなをいとよく思ひいらるれとかれはいとかやうに} きははなれたる												
⑩	1273 ⑧	○	—	○	○	○	○	○	○	○	○	○	—
	かたほなるおもひましらす {人の御有さまもおもふにあかぬところなくて} 物し給ふへきを												
⑪	1275 ⑬	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	—
	かりかねもつらをはなれぬうらやましく {き、給ふらんかし} 風はたさむく												
⑫	1276 ②	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	—
	さうふれんをひき給<<すのうちにきかせたてまつる>>おもひをよひかほなるは	見消											

		保坂	穂久	池田	御物	榊原	為家	尾州	平瀬	伏見	陽明	横山	詞書
13	1276 ③	×	×	○	○	○	○	○	—	○	○	○	—
14	1276 ⑫	×	×	○	○	○	○	○	—	○	○	○	—
15	1276 ⑫	×	×	○	○	○	○	○	—	○	○	○	—
16	1276 ⑭	×	×	○	○	○	○	○	—	○	○	○	—
17	1277 ⑥	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	—
18	1278 ⑦	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	—
19	1278 ⑦	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	—
		○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	—
20	1279 ⑥	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	—
21	1279 ⑬⑭	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		補筆	見消	×	×	×	×	×	×	×	×	×	—
22	1281 ⑬	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	—
		○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	—
23	1283 ①	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	—
24	1283 ③	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	—
25	1283 ⑦	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	—
26	1283 ⑩	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	—
27	1285 ②	○	○	×	△ つた へて	×	×	△ つた たへて	△ つた たへて	×	×	×	—
28	1285 ⑧	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	—
29	1285 ⑬	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	—
30	1286 ②	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	—
		○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	—
31	1286 ③	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	—

【表5-2 鈴虫に見られる文言の脱入】

		保坂	穂久	池田	御物	国冬	為氏	俊成	中山	尾州	伏見	横山	陽明	詞書
①	1291 ⑪	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	—
②	1296 ⑩	○	○	×	○	○	×	×	×	○	×	×	×	○
③	1297 ⑤	×	×	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	△ にこそ あるへき
		○	○	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×
④	1302 ③	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	—
⑤	1302 ③	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	—
⑥	1304 ⑦	○	○	×	○	×	×	○	○	×	×	×	×	—

謝辞

資料の利用と翻刻の掲載を御許可くださった、東京国立博物館、穂久邇文庫の竹本泰一氏に、記して心より感謝申し上げます。

付記

本稿は平成二八年度科学研究費補助金学術研究助成基金助成金（基盤研究C）による研究課題「『源氏物語』写本との比較から見た国宝『源氏物語絵巻』詞書の日本語学的研究」（課題番号16K02731）の研究成果の一部である。